

第2回京都市下京区西部エリア活性化将来構想策定委員会 議事録

《日時》

平成26年8月1日（金）午後1時～午後3時

《場所》

京都市中央卸売市場第一市場 関連10号棟3階 大会議室

《出席者》

別紙一覧表参照

《議事録》

1. 開会

－省略－（欠席：大瀨委員・川原委員・西村委員）

2. 議題

◆土井委員長

今日は午前中に8名の委員の皆様と京都駅西部エリアを実際に見て回った。大変暑い中、皆様お疲れ様でした。こんなに暑い日になるとは思っていなかったが、共に汗を流して会話し、一体感を高めるという点ではプラスになったかもしれない。準備いただいた事務局の皆様、そして道中、地元の池本委員、内田委員、本政委員には本当にお世話になり、改めて御礼を申し上げる。

現場視察を通して、このエリアには様々な資源がたくさんあるということが改めてよくわかった。京都駅から梅小路公園まで歩いたが、JR沿いの道を通ると10分もかからず、バスに乗らなくても十分歩ける距離であるとわかり、空間的な距離感の把握ができた。また、多くの資源があるのだが、それがまだまだ自分たちの地域のものになっていないという印象を抱いた。本エリアに対するそのような印象は、全国、そして京都市内の人にも感じられているだろう。さらに付け加えれば、下京区の人にももっとこのエリアのことを知っていただきたいし、それが地域のあり方に大きな役割を持つのではないかと感じた次第である。

私の感想は以上とさせていただきます、議事を進めさせていただきたいと思う。

本日の議題は2つあり、1点目が「京都駅西部エリア活性化のイメージについて」である。まずこちらについて事務局から資料の説明をいただき、そのうえで2点目の「意見交換」に移り、各委員から御意見を頂戴したい。今日は、活性化のイメージを皆様と共有することで、答申に向けて一歩でも近づいていきたいと思う。それでは、事務局から御説明いただきたい。

【資料説明】－省略－

◆土井委員長

今日は資料2と資料3をベースに、この京都駅西部エリアの活性化のイメージを皆様と議論していきたいと考えている。

最初に、私の方から議論の進め方について皆様と共有できたらと思っている。資料2の概要版をご覧いただきたい。活性化のイメージということだが、まず「活性化」という言葉の意味が、人によって違う可能性がある。「活性化」と言っても意味が違ふと、それぞれの意見がよくわからないということになりがちなので、ここでの「活性化」が何を意味するかということについて、事務局の方と考えてきたものをまず、見ていただければと思う。

資料2の右側に示すように、このエリアの活性化というのは「賑わいと回遊のあるまちづくり」ということで、具体的には次に述べる3つの機能を高めていくということになる。1つめは「都心居住」ということで、京都駅に近く立派な公園もあり居住環境はとても良いため、もっと多くの人々に住んでいただきたいということである。2つめは「商業・ビジネス」ということで、たくさんの事業所や商業施設もあるため、業務機能についてできるだけ元気のいい地域にしようということである。そして3つめは「観光・文化」ということで、京都市内だけでなく、広く世界から人が集まってくるような場所にしていきたいということである。この3つの機能を高めるということが、今回この地域の活性化になるのではないかとという提案である。この提案は、資料2の左側、「現状、ポテンシャル・課題」から導き出されている。

この将来構想では、京都市が所有する土地に何を作っていくかということをお話するだけではなく、この地域の企業や地元住民の皆様と同じ方向を向いて力を注ぎ、関係する企業や住民の皆様とともに一緒に、地域全体をもっと良くしていくということを大きな目的にされていると思う。したがって、できるだけわかりやすい目標を提示していくことが大事であり、そのためにこのエリアらしいコンセプトを、これから皆様と考えていきたい。そして、資料2に「目標値」と書いてあるように、皆様と目標、できれば数値目標を共有・設定しておくほうが取組に関する評価をすることができし、PDCAにおいても話がしやすくなると考えている。

この京都駅西部エリアは京都市のなかでも非常に大事なところなので、ここの持っている役割を京都市民にもっと知っていただき、使っていただきたい。そうすれば、この地域も非常に賑わい、地域の人たちも潤っていく。

この地域の活性化を考えるにあたって、私は「小さな回遊」「大きな回遊」というイメージを持つことが大切であると考えている。大きな回遊という意味では、日本中からこのエリアに来ていただいでゆっくりまちを楽しんでいただきたいし、小さな回遊という意味では、この地域の人たちがこのまちを楽しむために色々な回遊をうまく組み合わせることができれば良いと考えている。こうしたイメージは、資料2の「今後の方向性」のなかに表現されているように思う。

委員の皆様からは、今後の方向性についてぜひご意見いただきたいと思う。資料2の右側、「今後の方向性」で掲げられた4つの方向性についての具体的な意見でもよいし、それに限らず、様々な観点からご意見を頂戴できればありがたいと思う。今日はまず、地元の方からご意見をいただきたい。まずは、午前中の現地視察において歩きながらこのまちの話を随分ご説明いただいた、本政委員からご意見を述べていただきたいと思う。

◆本政委員

久しぶりに歩いたが、私が住んでいる所の周囲にも見るところがたくさんあり、外部の視点から見ると良いところであると改めて思った。同時に、外からお越しになる方々に、梅小路公園を中心にしてその周囲にもどれだけ寄っていただけるか、そしてお金を落としていただけるかということ

が課題であるとも感じた。

今の状況ではまだ活性化のイメージがなかなか湧いてこず、最終的には梅小路公園に京都鉄道博物館ができて初めて、はっきりとした思いができてくるのではないかと思う。また、七条大宮から西の商店街では、シャッターの閉まっている店が相当あって悲しいが、なんとか梅小路公園を中心として西部エリアが活性化するなかで、商店街が生き返ってくれたら嬉しく思う。

2016 年春に鉄道博物館ができることによって、このエリアには一層人が寄ってくるだろうし、そのうえでもう一回この地域の将来を考え直してみることが大事だと思う。商店街のなかの人にも、博物館開業以降の動向を見極めようという考えがあるように思えて仕方がない。そのなかで、もう少し商店街自身で活性化しようという機運も生まれてくるのではないかと考えている。

◆土井委員長

色々と状況が変わっていくなかで、そうならないとわからないということもあると思うが、これからどのように能動的にこの地域を変えていくのかということと一緒に考えていきたい。

では次に、杉本委員にお話しいただきたい。

◆杉本委員

私は観光都市・京都のなかで重要文化財の京町家という観光資源を維持継承しているという立場の者であり、観光行政と地元住民の暮らしの関係性について考えられる機会も多い。そこで感じるのは、観光化が進むと、色々な所から来る多くの観光客の存在によって、地元住民の暮らしやすさは必ず削がれる部分があるということである。地域活性化について議論をする際にはそういうところにも配慮することが必要で、このエリアの開発行政を担当する課とは別に、観光文化の行政施策というものともある程度うまくリンクしながら進めなくてはならないと考える。この構想は、地元の発展や地元の人々の幸福感というものにもつながらなければならないと思うので、そういった視点も欠落することなく進めていくべきだと思う。

事務局が作成した資料を見ていると、壮年期・子ども世代に対するアプローチが主だが、実際のところ老年者の数は非常に多く、地元住民の平均年齢は恐らく 60 歳以上であろうかと思う。そうした高年齢層の人たちも和やかに楽しめる、はじかれないような雰囲気をもった計画にすることが理想である。

◆土井委員長

高齢者の話は非常に大事で、今日も島原の歌舞練場が今はデイサービスの施設になっていると聞き、時代に合った転換をされていると感じた。観光と住まいをうまく調和していくという試みがされており、そういうことがこの地域でもうまくできれば良いというのがご発言の趣旨だったかと思う。ここに住みたいと観光客にも思ってもらえるような地域にしていくことも大切である。

次に、池本委員にご発言いただきたい。

◆池本委員

私は中央市場には 63 年前からお世話になっている。当時から食に対する関心は高いものがあつたが、関心の質が現在ではまったく違うものとなっており、食の流通を見ても、コンビニ・大型量

販店・スーパーなど、様々な形態に変化してきている。

私は、何か物事を行うにあたって、誰がやるのかということが一番大事だと思う。例えば、この地域の商店街も非常に衰退しているが、この地域で商いをする人の気持ちが、ともすれば人任せになっているのではないかと私は感じている。自分たちの力で活性化するという気合いがなくてはダメだ。その時のリーダーがどれだけの使命感を持って取り組んでいくかが一番大事である。

例えば京都市中央卸売市場第一市場においても、水産棟はあと6年で、青果棟はあと11年で整備が完了する予定だが、そのために、店舗の配置や駐車場をどうするかなどの細かい面で、青果部会や水産部会などの個々の部会で内容を詰めていくことが大事となっている。

七条千本繁栄会も衰退しているが、商店街の人たちは、スーパーやコンビニにできないことをしなくてはならないと考える。それは、対面売りであると私は考える。今日見ていただいた山定という魚屋は京都 No.1 だと私は思っているが、あの店がすべての商品を対面で売っている。対面で売るなかで、店主はプロとして「今はこれが一番おいしい」というお勧めをすることができる。そうしてお客さんの信頼を得ることが一番大事だが、そこが今は大きく欠けている。行政もそういうことについては、もう少し入り込んで指導をしてもらわなくてはならない。

七条大宮から西のエリアは大変厳しい環境にあるが、もたれあいになってはいけない。知恵を絞って出し合い、議論しながら越えていかなくてはならない。誰かがやってくれると思っていてはいけない。地域が自分たちのことは自分たちでやるのだと気合を持って取り組まないことには活性化は大変難しい。

もう1点、京都駅から今日歩いたなかで、梅小路は案外近いと感じた。近いということは、今の健康志向のなかで歩くということは大事なことで、アクセスの向上を考えることも大切だが、すでに整備されているものを活用するという視点も意識する必要があると思う。

梅小路公園は災害時の広域避難場所になっている。過去には野球場やサッカー場をつくってはどうかという話があり、今は立派な公園ができた。2年前には京都水族館がオープンし、2016年春には鉄道博物館が開業する。こうした経緯を踏まえつつ、今度、七条に新駅ができる可能性があるならば、その駅と同時にそのお客さんに対する自分たちの思いを受け継ぐためにも、地域がしっかり勉強をするという姿勢が大事である。私は、中央市場の再整備をめぐる関係者の取り組みを、地域が主体となったまちづくりの事例として、地域の人たちも学んでいただきたいという思いを持っている。

◆土井委員長

お話を伺うなかで、この計画のなかでも、「活性化は人任せにせず、自分のこととして取り組む」ということをきちんと書いておく必要があると思った。大変重要なお話をいただいたが、それを計画のなかでどう表現していくかについては、またぜひ相談させていただきたい。将来構想は京都市が作成するものであるが、その取り組み主体はすべてが京都市というわけではないことがポイントであり、地域の人々に十分わかっていただけるような内容の計画にしていくことが非常に大事だと思う。

◆池本委員

まず地域がやってそれを京都市がバックアップする。その流れが大事である。

◆土井委員長

それを計画の中に位置付けたいと思う。

また、七条新駅の話があったが、この駅を、単に駅ができるだけで終わらせるのではなく、人が集い、利用するターミナル化していくために、地域がどうしていくかを考える必要があるようにも思う。

◆池本委員

中央市場の再整備においても賑わいの施設という話がでていますが、そこで想定されている集客施設とは、おそらく築地の場外市場のようなものであろうと思う。場内のなかで観光客を呼ぶ取組を私たちはやっていないが、再整備に伴ってもし余剰地が生じるのであれば、余剰地に整備する賑わいの施設と観光客を呼び込む取組を連動させれば、新駅についても価値が出てくるように思う。それはひいては、新千本商店街の繁栄、活性化につながるのではないかと考えている。にぎわい施設や新駅ができることによって地域がどう取り組んでいくかということも、地域の人たちにとっての目標値になると思う。観光客は中央市場には入れないが、賑わい施設には来ていただいて、その流れの中で中央市場も見学をしていただくぐらいの気概は、我々も持っていきたいと思っている。

◆土井委員長

駅ができたならこれだけのメリットが鉄道側にもあるということを JR にも伝えていくことが、今のお話のなかで大事な点だと感じた。

次に、新山委員からご意見をいただきたい。

◆新山委員

前回は出席できずに申し訳ありませんでした。

私がこの委員会にどういう立場で出ているかというと、京都市中央卸売市場第一市場の施設再整備と改革の委員会に参加しており、その関係で出ているということになると思う。

第一市場は京都市内だけでなく周辺府県までカバーするという役割を持っているが、まずは市場で扱っている物を地元の七条商店街で市民や観光客の方々に提供することが、とても重要なことではないかと思う。そのプランをどのように作っていくかということについては、もっと突っ込んで議論しなければならないと思う。

それを考えていくときに思うことは3点ある。1点目は、市場の物を扱う上での良さを生かすということになると、チェーン店ではなく個店で、かつ対面で売っていくことにあると思うので、そういう店づくりや人材育成について考えていかなければならないということである。

もう1点は、これから京都は急速に高齢化社会に突入し、生活に必要なものをどのように調達するのかについて、従来と考えを大きく変えていかなければならない時代になるなかで、七条商店街もそういう時代に向けて商店街づくりをするということを考えたほうがよいということである。第一市場と七条商店街との結びつきについては、まだ私自身も漠としたことしか考えられていないが、これ自体、一つのプロジェクトにするぐらい突っ込んだ検討が必要ではないかと思う次第である。七条商店街に留まらず、この西部エリア全体が高齢化社会のなかで暮らし方が大きく変わっていくと思う。若い方々と高齢者のどちらにとっても住みやすいまちをどうやって作っていくかというこ

とを考える必要がある。身の回りの物や食べ物を無理のないかたちで入手できるようにするためにどうするか、大きなポイントになるのではないか。それは京都市内全体で考えていかなくてはならないことだと思うので、その点において、西部エリアの活性化の取り組みをモデル地域のように位置づけることができるのではないかと考える。

3点目は、この委員会の中心になるのは、西部エリアに居住されたり、あるいはここでお仕事をされている方であるべきだということである。子どもは応援する側として加わるのが本来だと思うので、そういう議論ができるよう、京都市にもお考えいただきたいと思っている。

◆土井委員長

今出していただいた視点の一つに人を育てることがあったが、それは後の2つの話とも非常に関係しているのではないかと思う。地域の人たちにどのように主体になっていただくかということを、資料2で提示されている4つのなかで、横串を刺すようなかたちで入れていく必要があると感じた。

また、この地域で高齢化社会に対応した居住モデルができると、京都全体で取り組みうる汎用性のあるモデルにすることができるかもしれないと感じた

次は市村委員にお願いできればと思う。

◆市村委員

現在、下京西部エリアの6商店街で「ほいっと七条」というグループをつくっており、活性化に取り組んでいる。

私が商売を手伝いだした昭和43年頃はまだ景気が良く、当時はまちづくり三法という法律があり、百貨店は京都商店連盟の承諾を得なければ店舗の拡大ができなかった時代であった。また私の属する化粧品業界では、再販売価格維持制度によって定価での販売が保障されていた。しかし、これらが規制緩和で撤廃され、言ってみれば小売店は丸裸にされてしまった。

厳しい時代となったわけだが、それでも何とかしようと6つの商店街をグループ化したところ、補助金の交付を受け、それを活用した様々な事業ができるようになった。例えば、6つの商店街と5つの小学校で「梅小路いきいき学習」というスチューデント・シティの取り組みを行っている。これは、小学校5年生は各店を訪問し、小学校6年生は各店の店員になるという取組だが、児童にも父兄にもとても喜んでもらっている。商売人として儲けることも大事だが、社会との結びつきも大事で、それが商店街が生き残る道だと思っている。

それから、梅小路公園に水族館ができたことにより、観光客が増え、島原の花街文化が見直されたりもしているが、必ずしも商売とは結びついていないとも感じている。今後、いかに商店街の活性化と結びつけるかというためにも、資料2で掲げられている「都心居住」「商業・ビジネス」「観光・文化」という3つの柱が現時点ではバラバラな状態であるので、まちづくりのセンター的な存在があればお互いに相談しやすいと思う。これから地域が発展していくためにはそのような第三者的な仲介役となる組織が必要だと思うので、行政で検討していただきたい。

◆土井委員長

次に、小西委員にお願いしたい。

◆小西委員

この地域の特徴の一つとして、京都市中央卸売市場という食のインフラがあり、「京の食文化ミュージアム・あじわい館」と「KYOCA（京果会館）」という2つの食に関する情報発信施設があるということが挙げられる。こうした流れができつつあるなかで、この地域の一つの特徴としての食文化の形成について、強力に今後進めていく必要があると思っている。

そのなかで、誰かに頼むというのではなく、それぞれが主体者としてやるべきことをやって、その上で連携していくということが大事であると私は考える。私どもも長年に渡って食に関してこだわってきた事業体であり、今後も主体的に食文化形成にあたってリードしていきたいと思っている。

京都リサーチパーク（KRP）には340社が既に入っており、昼間の就業人口が約4,000人となっているのだが、食のインフラが充実したまちにも関わらず、飲食施設が驚くほど少ない。食堂施設を抱えている事業者もそれほど多くはないため、かなりたくさんのお弁当屋さんが出てきている状況である。それが悪いというわけではないが、飲食施設を誘致することについても、我々がKRPと共に主体的に動いていければと思っている。

もう1点、今回の委員会の話に連動するかはわからないが、最近のKRPの入居の特徴として、創業を担っている企業が集約してきているという少し変わった流れがあり、この流れをうまくサポートすれば、例えばバイオや再生医療の事業の芽が出てくるのではないかとと思っている。そういうものも含めて、色々な面で主体的あるいは支援的に動いていきたいと思っている。

◆土井委員長

食も創業と関係があると思うので、昼食や夕食の関係だけではなくビジネスのつながりができるかもしれないとお話を伺っていて感じた。大阪の国立循環器病研究センターが発行する『国循の美味しい！かるしおレシピ』というレシピ本が大変よく売れているという話を聞いたが、そのように共同で何かできるようなことをうまくコーディネートしていただければ、新しい分野が芽生えるかもしれないと直感的に思った。

今ある資源をうまく組み合わせることでビジネスにつながっていき、あるいは雇用が広がっていくということになれば、それがこの地域を支える産業をつくり出すということになっていくと思うので、また何かこれから色々材料があればご提示いただければありがたいと思う。

続いて、内田委員からご意見をいただきたい。先日、京果会館のリノベーション施設を見せていただき、素晴らしいと思った。あの場所からこのまちを見るとまた違う見え方がして、まちを見るのに非常に良い場所だと思った。

◆内田委員

先日は多くの方々にKYOCA（京果会館）に来ていただいてありがとうございました。まだ部分開業ではあるものの、現在、1階のレストランには多くの方々に来ていただいている。

元々、8年前に京都市中央卸売市場第一市場の再整備の話があり、京都市からの依頼により、京都市の方針に沿って、私ども民間が独自にお金を出してビルを建てた。その後、3階が空きそうだったので京都市に声をかけて、京の食文化ミュージアム・あじわい館に入居していただいた。

KYOCA（京果会館）に関しても、市長あるいは市議会議員の方々からあの辺りに来られる方のた

めに食べる場所が欲しいということをお聞きして、1階にレストランを入れたビルにした。これから食に関する色々な発信ができる場所にしていこうと思っている。

このあじわい館と KYOCA（京果会館）の2つに関しては、京都市の方向性に従ってはいるが、民間が主導になっている一つの事例になっていると思う。

また、回遊性という点で、レンタサイクルというのは非常に良い考えだと思う。サイクルロードについても整備を考えるべきだと思う。七条通には自転車を通る場所を整備してもらっているが、今述べたような施設や梅小路公園をつなぎ、このエリアをずっと回れるような環境を整備すれば、来られる方々にとっても利便性が高いと思う。

それと、使う人それぞれの目線で見えていくのが大事だと思う。例えば外国人・他の都道府県から来る人・京都の人・近所の人、年齢層でいうと子ども・大人など色々なグルーピングができ、それぞれの人がこのエリアに色々な興味を持って来訪される。外国人や他の都道府県から来る人は、角屋や島原の一带などに興味があり、他にも清水寺や二条城、金閣寺などにも行くと考えられる。ということは、その辺りからのアクセスをどうするか考える必要がある。それから京都の人は、水族館、鉄道博物館、梅小路公園を楽しむと考えられ、ご飯を食べる施設が必要である。そのようにさまざまにグルーピングできる人々のそれぞれの目線に立って、必要なものを考えていくことが大事だと思う。

また、今日訪れた魚屋には本当に驚いた。あれだけの狭いスペースであれだけの人が集まるというのは本当に感心すると同時に、やり方次第で商店街はまだまだ活性化していく方法があるのではと非常に強く感じた。

◆土井委員長

地域の人も含めて色々な種類の人たちがいるので、その人たちの目線に応じて回遊性も違ってくるということで、それに合わせた回遊性なり賑わいの考え方を整理していく必要がある。

対面販売について、売っている人がニコニコしていたので、それだけでも魅力があると感じた。

◆新山委員

対面販売に加えて目利きで売れていると思う。

◆土井委員長

次に、大島委員にお願いしたい。

◆大島委員

午前中じっくり拝見して非常に有意義だったと思っている。山定については、主婦としても品揃えや雰囲気に関心されるものがあり、出会えたことは非常に大きな成果であったと思っている。午前中の感想から、回遊・観光の視点と都市居住という2点について意見を述べさせていただく。

まず、改めてこのエリアを拝見して、七条通に戦前木造の住宅、いわゆる町家がたくさん残っていると思った。かつ、島原の界隈に特に多かったが、2階の壁面にタイルを貼った様式で非常にしっかり作られていると感じた。そういう独特の意匠を持った、かつ昔ながらの住文化、商文化が残っており、これはまちの特徴を示すという点で宝だと思った。

梅小路という大型の集客施設が集まるエリアがあり、一方で細街路のなかに入るとキラッと光るような宝があるというように、この地域の魅力は大きく分けて2通りあると思うが、大通り目線のダイジェストスポットの観光と、学びという視点でより深くまちと関わっていく細街路目線、これについてはレイヤーを分けて考えていったほうがよいのではと思った。同じ人が行く場合もあるかもしれないが、戦略としてはレイヤーを分けて、大通り目線、細街路目線というのを分けていったほうがよいのではと思った。

ここで1つ質問だが、下京区は人口増と書かれていたが、その「増」は市内からの住替えなのか、あるいは他府県から来られたのか、それによってその細街路目線の観光レイヤーというのも随分変わってくると思うので、その点を教えていただきたいと思った。

2点目の都心居住についてだが、資料3の17ページに「京都らしい都心居住の空間の創出」とあり、事業（例）として3つめに「京都らしい共同住宅整備誘導」とある。これは町家型集合住宅を言われているのかと思うが、この取り組みについては、かつて京都市が熱心に取り組まれていたが、現在は特に動かれていないように思う。それ以外の「町家の利用促進」「空き家の活用」「歩行者中心の道路整備 等」については、このエリア独自の政策というよりは市内全体で推進されている政策でもあるので、ここでこのエリアらしいものを展開していくのであれば、どういった視点を重視して具体的に何をしていくかを明確にしていくことが大事であると思った。

エリアマネジメントの組織を立ち上げていくことについては、最近では自治体においても、NPOの形態をとって空き家バンクを手掛けたり、不動産の事業にも手を付けるエリアマネジメント組織が見られるようになったが、例えばそういうところまでやるような組織をつくっていくのかどうか、組織のイメージについても検討すればよいのではと感じた。現在、京都市内でエリアマネジメントをされている組織がいくつかあるが、どちらかというと合意形成や情報発信など、輪を大事にした組織が多いように思う。そうしたなかで、いわば「攻め」の事業も展開できるような組織も視野に入れるのかどうかについては、エリアマネジメントを考えるうえで重要なポイントだと感じた。

◆土井委員長

良いまちができていくと皆様の資産がうまく保全される、あるいは京都市が投資をすることによって固定資産税が上がるといったような話を、本当はエリアマネジメントにおいてやっていかなければならない。できれば区役所の皆様を含めて、そうした将来を見据えた、PDCA サイクルを回していけるような組織があればよいと思うが、この点についてはまた皆様と相談しながら考えていきたいと思う。

◆大島委員

町家の利活用等についても、従来は事業者やNPOが取り組んでいた。それを例えば、地域密着型のマネジメント組織が、このまちにふさわしい人や活動を引っ張ってくるようなところまで引き受けられるようにするかどうかも念頭に置いて構想するのか、ということである。

◆土井委員長

人口増について質問があったが、市内の住替えによるものと他府県からの転入によるもののどちらが多いかはわかるのだろうか。

◆事務局

京都市の集計によると、平成 24 年 10 月から平成 25 年 9 月における下京区の転入人口は 8,328 名だが、このうち区内の住替えが 1,154 名、市内他区からが 2,830 名、京都府内からが 544 名、他府県からが 3,800 名である。

◆土井委員長

それも資料のデータのなかに入れていただきたい。

次に、荒川委員にお願いしたい。

◆荒川委員

回遊性の話について、BRT のようなバス路線をつくったらどうかという意見もあったが、このエリアは京都駅とも近い場所であり、あまり BRT はイメージできないと思った。それよりは、千葉県野田市の「まめバス」のように、小回りのきく小型のバスがそれぞれのポイントをピックアップし、ちょっと乗ってちょっと降りるといった利用を想定するほうが現実的であると思った。

また、資料 3 の 21 ページに東京・代官山の蔦屋書店の写真が載っており、あのような施設がこの地域にできるというのは、ひょっとしたらすごく面白いのではないかと思った。というのは、TSUTAYA といえば一般的には本屋かレンタルビデオ屋というイメージがあるが、今は随分進化していて、代官山の蔦屋書店はそれ自体がメディアセンターとなっている。本を中心に DVD や色々な資料があり、ゆったりしたカフェやおいしいレストランがあり、周りには小さな雑貨店などのショップやギャラリーもありという風に、一つのセンターになっている。

そこに来る人たちも様々で、近隣のお年寄りが日常的にお茶を飲みにやったり、起業したばかりの若手の人たちが打ち合わせに使ったり、土日になると子連れの人たちが散歩しに来たりする。色々なニーズに応えられる面白いスペースになっていて、それを契機としてまちが少しずつ変わってきている。

京都駅西部エリアは学ぶ所も遊ぶ所もあり、食べる所は少なめだが働くところも住むところも充実している。そういう場所に何が欠けているのだろうと考えるときに、少しおしゃれな日常空間というか、水族館や鉄道博物館のようなお金を払って行く特別な場所と、商店街のような買い物のためだけに行く場所との中間に位置するものがないのではないかと、思いが至った。そのような少しおしゃれな場所ができて、そのために人が来るようになってきたら、変わっていくきっかけになるのではと思い、まさにモデルとしては良いのではないかと思った。

◆土井委員長

ありがとうございます。KRP の人たちが梅小路公園まで出かけるとか、打ち合わせをするとか、そうした発想は現在の状況ではなかなか出てこない。というのも、KRP から梅小路公園までは地図で見ると歩いて 5 分か 10 分ほどの距離にあるが、ルートが確立していないことが原因と思われる。回遊性という観点からは、KRP から京都駅までのアクセスについて、これまでは水族館のことばかり考えてきたが、もう少し、地域の人たちが来てもらえる仕組みを考えたいほうがいいと、お話を伺って感じた。

また、大阪のうめきた地区を運行する UMEGLE という小型の 100 円バスがあるが、このバスはう

めきた地区だけではなく JR 大阪駅の南側まで運行されている。そして、大きな回遊という側面については BRT という選択肢について資料には記載されているが、小さな回遊と大きな回遊を組み合わせていくという観点が大切である。

代官山の蔦屋書店については、委員の皆様も東京へ行く機会があれば一度ご覧になられるとよいと思う。佐賀県武雄市の市長が市立図書館の運営を民間に委託して、その手法については賛否両論あるが、その経緯は、代官山の蔦屋書店の前で武井市長がカルチュア・コンビニエンス・クラブの社長を捕まえて、武雄市にぜひ進出してほしいと話をしたということにあると伺っている。こうした施設は京都市だけで建てられるものではなく、みなさんとかかわりの中で考えていくものであるが、確かに、挙げられた例のような人が立ち寄れるような施設があれば、確かにインパクトは違ってくると思う。

最後になったが、東委員からご意見を頂戴したい。

◆東委員

地域の皆さんが人材育成やリーダーの必要性について話をされているのを伺って感じたのは、この地域の活性化について今後期待が持てるということである。

また、第1回の委員会の席上で池本委員が JR の駅はできないとおっしゃっていたのが、今日は90%できるだろうとお話されていて、心強いと感じ、また楽しみに思っている。駅というのは、みんなから請われて、できたらいいな、できたらこうなるなど思われながら作られる駅はやはり素晴らしいと思うので、私たちも機会があれば新駅設置の方向で努力したいと考えている。

梅小路エリアに新駅ができれば確かに便利になるが、それ以外の観点で意見を申し上げれば、大勢の方が利用される京都駅と梅小路公園との間には、午前中の現地視察で歩いた東海道線の線路沿いや七条通、そして3本の細い通りがある。ここには残念ながら廃校になった中学校と小学校があって、それが使われていない状態にあることを考えると、京都駅と梅小路公園とに挟まれたこのエリアも同時に活性化するような策を考えてもよいのではないか。例えば東海道線の線路沿いの道についても、今日の現地視察で目にしたとおり現在は殺伐とした風景が広がっているが、京都市の道路との境界線に JR 西日本は少し土地を有しているので、そのあたりをもう少し美しいものにし、また道路についてももっと楽しいものにすれば、京都駅から梅小路公園へ向かう際に現在感じてしまうような心理的な距離感も、縮めることができるだろう。さらに、先ほど申し上げた2つの学校跡地が何かに活用されることで周辺地域も含めて人が行き交う姿を、この西部地区の活性化のなかで考えてもよいのではないか。

そのためには、JR 西日本も含めた周辺の企業と協力しながら、街の整理というものに取り組む時代にこれから入っていくのだろうと感じた次第である。駅の周辺の地図を描くと、駅を中心として描き、周辺をわずかに案内するというのが一般的であるが、そういうことなく、京都駅を一番東端に位置させ、七条第三地区を西に据え、元安寧小学校の付近を真ん中に据えと、まったく違う地図が出来上がる。そうした視点の地図も鉄道側が持ちながら、この地域というものを見てもらえるようにすればいいと感じた。もちろん、私が今取り上げているエリアは落ち着いた住宅街なので、人がぞろぞろ歩くだけがいいのかどうか、地元の人の意見もあるだろうが、特にやはり、七条の商店街を魅力があって皆が通るものにして、西部地域とつながるようになれば良いと感じる次第である。

◆土井委員長

回遊性という視点からは、前回は話が出たが、自動車のことをあまり心配せずに歩ける道が大事だということに加えて、また、ちょっと休むためのベンチが設置されているのと設置されていないのでは全然違うということもある。そして、ベンチの存在がみなに知られているということが重要で、現在回遊マップも制作されているが、そうしたマップにおいても休めるポイントについてどんどん掲載していくことや、あるいは民間の皆さんにご協力いただいてベンチをどんどん設置していくとか、そういった仕組みも作っていけばかなり地域の印象も変わってくるのではないだろうか。日影があつたり少し休む場所があつたりすると、それだけで雰囲気が大きく変わり、もう少し歩こうかという気持ちにもさせてだろう。

委員の皆様から一通り意見を頂戴し、地域の人々がリーダーシップを発揮する重要性や、賑わいづくりのために来訪者をセグメントに分けて考えることの必要性、居住機能と観光との間でコンフリクトを起こさないようにすることの必要性等、様々な視点を出していただいた。本日の委員の皆様からの意見をもとに、資料2の「今後の方向性」の右側に記載されている「エリアらしいコンセプト」について事務局のほうで素案を用意して、次回の委員会に置いて委員の皆様にも見ていただくことにして、皆さんのお気持ちと合うかどうかを確認する作業を行っていきたいと思う。

◆土井委員長

本日いただいたご意見は非常に幅広かったが、まとまっていた。放談会にならずに、委員の皆様と同じ方向を向いていただけている印象を受けた。本日お話しいただいたことをベースに、中身を詰める作業を事務局と一緒にさせていただいて、また次に皆様からご意見をいただく場を設けさせていただきたいと考えている。

本日はありがとうございました。

以上

京都市下京区西部エリア活性化将来構想策定委員会

第2回委員会の出席者一覧

	氏 名	役 職 等
委員長	ど い つとむ 土井 勉	京都大学大学院工学研究科 特定教授
	あずま のりあき 東 憲昭	京都商工会議所 地域開発・都市整備委員会 副委員長 (京都駅ビル開発株式会社 代表取締役社長)
	あらかわ あけ み 荒川 朱美	京都造形芸術大学環境デザイン学科 教授
	いけもと しゅうぞう 池本 周三	京都市中央卸売市場協会 会長 (京都全魚類卸協同組合 理事長)
	いちむら まさる 市村 勝	梅小路活性化委員会 委員長
	うちだ たかし 内田 隆	京都市中央卸売市場協会 副会長 (京都青果合同株式会社 代表取締役社長)
	おおしま さち こ 大島 祥子	一級建築士事務所 スーク創生事務所 代表
	こにし まさゆき 小西 雅之	大阪ガス株式会社 常務執行役員 京滋地区総支配人
	すぎもと せつこ 杉本 節子	公益財団法人奈良屋記念杉本家保存会 常務理事 料理研究家
	にいやま ようこ 新山 陽子	京都大学大学院農学研究科 教授
	ほんまさ かずよし 本政 和好	大内学区自治連合会 会長

《五十音順（委員長除く）、敬称略》